

清く明るく楽しく人理修復しようか【FGO】

如月龍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

F a t e / G r a n d O r d e r のぐだ子率いるカルデアを紹介します。

ぐだ子の名前は特になくて、「マスター」「嬢ちゃん」などと呼ばれています。

そのうち設定するかも。

ゲームをプレイしながら思いついたものを思いついたまま、ギャグやシリアス織り交ぜながらつらつら書いていきます。

短編集なので、設定は引き継いでいますが話自体はつながっていません。

たぶん、どこから読んでも大丈夫！(´)

語り部はアンデルセンが多め。

おバカで弱くておまけに不運。

悪い方に三拍子そろったマスター。

※基本的に持っている鯖のみ。

# 目次

我がマスターは頭がゆるい	1
エミヤさんの受難	4
作家さんとネタさがし♪	8
慈悲などいらぬ	14
Fは不幸のF	18

我がマスターは頭がゆるい

うちのマスターは馬鹿だ。

「おいマスター。今週のミッションは終わったのか？」

「へ？」

その一、質問を一回で理解してくれない。

「マスター。今夜の献立なんだが…」

「私ハンバーグが良いな！」

その二、思考が小学生並み。

ちなみにハンバーグは昨日食べたばかりだ。

「ルーン？あー…また今度な」

「おねがーい！ねえ、頼れるのはあなただけなの！」

その三、頭のネジが緩い。

可愛くおねだりすれば大抵は許されると思っている。

「…つたく、しようがねえな」

騙されるサーヴァントも悪影響なのだが。

だがそれもカルデア内部での話。

一たび外の世界へ踏み出すと、雰囲気が劇的に変わるのだ。

それはもう、凜々しくたくましいほどに…

「ひいひいアンデルセえええン!!高いよおおお」

「煩いぞ！俺にしがみつくな…！」

外見だけは。

今まで馬鹿なりにうまいこと生き抜いてきたのだろう、ということにしたい。

黙っていれば、出来る主人に見えるのだこれが。

中身は変わらない…つまり馬鹿のままだ。

ああ、バカバカ言いすぎてゲシュタルト崩壊を起こしそうだ。

そして極め付けが、涙もろい、弱虫、である。

それでいて打たれ強いのがから扱いにくいことこの上ないのだ。

「……でやらなきやヒーローじゃないね！」

「マスターが言うんじやあしようがねえな……！」

ここぞというときに我らサーヴァントを鼓舞するのは必ず彼女だ。何故か分からないが、底抜けの自信と明るさを持っていて、サーヴァントからの信頼は厚いのだ。

彼女の境遇を鑑みれば根暗に育っていてもおかしくないのだが：そこら辺はよく考えていないのだろう。

短絡思考で、何とかなる、という結論にたどり着く。

それが功を奏しているのだろう。

「さて…決着をつけようか」

決まってこういう時のマスターは、恐ろしいほどの殺気を放つのだ。

これで彼女の本懐、と言っても過言ではない。

何も大した援護などできやしないのに、殺気だけは一人前。

そしてサーヴァントを大事にする。

おまけに自分も大事にしてくれる。

「お前らの力を見せてやれ！」

弱虫で泣き虫のくせに、ここぞというときの踏ん張りが強い。

我々サーヴァントでさえぞくりとさせる、まるで獣を体の中に飼っているようだ。

「よおーし、逃げるぞおおー！」

「撤退命令だ！ずらかるぞー！」

最後は深追いしない。決して無茶をしない。

彼女はそんな奴だった。

戦場を離れてしまえばまた普段通りのマスターに戻る。

馬鹿で、間抜けで、少しだけ愛嬌のある彼女に。

「ふん。貴様の愛嬌など認めたくもないがな！」

「みんなーアングレルセンが酷いんだよー！」

勝手にやってる。

だがそんな馬鹿にはまだ何かある。

自分で言うのもなんだが、洞察力には自信がある方だ。

彼女にはまだ隠していることがあるはずだ。

…まったくだらないことかもしれないが。

「うん？キヤスター、どうした？」

キヤスターのクーフーリンは俺よりもマスターとの付き合いが長い。  
い。

二人で何処かへ消えて行ってしまった。

彼なら何か知っているかもしれないが、俺から言えるのは此処までだ。

なんだかんだ俺も付き合いは長い方で、振り回されるのにも慣れてきている。

ちなみにあいつのお気に入りのサーヴァントは言うまでもなくキヤスターのクーフーリンだ。

なに？二人の間に何かあるかだと？

そんなもの俺は知らん。

興味もないわ。

マスターについてこれだけは言えること。

とにかく、頭がゆるい。

## エミヤさんの受難

「えみやああー！ー！ー！ー！大変だよう！」

「どうしたマスター。女性が廊下を走るなどはしたくないぞ」

「エミヤが二人！エミヤが！」

小腹を空かせた同胞のために午後のティータイムでも始めようとしていたところ。

いつものようにお騒がせマスターがやってきた。

「…おや。ついに私も宝具レベルが」

既に一度だけ強化されているが、それでも優秀なサーバーアントが増えてきたのを多少なりとも気にしているのだ。

いや。戦力が増えるのはいいことだ。うむ。

「違うのおおそうなんだけど違うのおお」

「少し落ち着いてくれマスター。状況がさっぱりつかめないんだが…」

マスターに腕を引っ張られる。

どうやら召喚ルームへ向かうらしい。

ところで今は、冬木を攻略中ではなかったか。

冬木と言っても、あの炎上都市ではない、まだ街並みを保つ方の、だが。

「エミヤだけど！エミヤじゃないの！アサシンなの！！」

「…ん？」

いや待て。

今何と言った？

「おいマスター…そんな話は、」

「エミヤあああ！」

バーン、と音がしそうな勢いで開け放たれた扉の向こう側には…なるほど。

確かに名前表示は“エミヤ”だった。

しかしクラスは、マスターの言うようにアサシン。

「やあ。君が…此処のエミヤくんか」  
そんな馬鹿な。

「いや…違う。聞いてくれ、おいマスター?」

「シユークリーム食べる!?それともどら焼きが良い??」

「じゃあ、どら焼きで」

「マスター…」

おやつに両方作っておいてよかった…ってそうじゃない。

アサシンもなにちゃっかり受け取ってるんだ!

あつさりしすぎだろ!?

この状況で疑問や質問はないのか…!

「エミヤの作るお菓子はおいしいねー」

「君が作ったのか…うん、好みの味だ」

「そ、そうか…それはよかった」

だからそうじゃないんだ。

分かった…分かったぞ。

そんな馬鹿な話があるかとも思ったが、このアサシンの正体は確実にあのんだ。

フードで顔を隠してはいるが、声も背格好も全く一緒だ。

「アサシン…、そのフード取ろうよ」

「取らねばならないか?」

「うん、だって此処、室内だし?」

「そうか…そうだな」

「ちよつ…とー!」

止める間もなくそのフードは脱がされた。

待ってくれ。

心の準備をくれたまえ…!

形はどうあれ、これは感動の再会というやつだろう!?

もうちよつと雰囲気というものを重視してくれ!

「んん…?おやおや…?」

マスターがアサシンの素顔をまじまじと見つめる。

まあ言いたいことは分かる。



二人の視線がいたい。  
なんでアサシンの方まで俺を見てくるんだ…。

「…おやこ？」

一瞬ぎくりとした。

だってこのマスターが、失礼ながらそんなに鋭いとは思わなかったからだ。

「髪と肌の色…一緒じゃん。何人？」

「いや…日本人なんだが…」

もはや突っ込みが追い付かない。

よし、やめよう。

今日はもう突っ込まないぞ。絶対に。

そう固く誓った。

「なるほどね…君もまたエミヤ、か」

「…え？」

「そっかー。うちアサシン少ないから困ってたの！同期の式ちゃんと一緒にレベリング頑張ろうね！」

一瞬アサシンの表情が和らいだ気がしたが、あることを思い出して見なかったことにした。

さすがに俺と縁の深い人物を寄越してくるのはやめてほしい。

正直もう二度とごめんである。

聖杯はどこまで俺の胃を刺激したら気が済むのだろう。

マスターの世話で手いっぱいだ。

「マスター…。その…、詳しく聞かなくていいのか？」

「うん？なにが？」

「いや…なんでもない」

抜けていて目を離せない、手にかかるマスターなのに、時々分かったような顔をするのはやめてほしいものだ。

さて、何人のサーヴァントがそれに気付いていることやら。

その目はいつもと違って、柔らかいまなざしの奥に透き通ったガラス玉をはめ込んでいるようだった。

\* \* \*

数日後。

再びマスターの呼ぶ声が響いた。

「エミヤあああ！お母さん！お母さんも！」

聖杯はどうやら俺に恨みがあるようだ。

言ってる傍から…。

ああ、当分胃薬は手放せなさそうだ。

## 作家さんとネタさがし♪

俺の一日は、ネタ探しに始まる。

…いや。仕事なんてしたくない。

したくはないんだが。

「ネタが見つつかれば仕事もすぐ終わる。そうだろう?」

「まあそうだねえ…」

「今はポ○モンGOとやらが流行りなのだろう!?これをネタにせずにいられるか…!」

「君のそういう愚直なところ、本当にすごいと思うよ…」

「素直と言え!馬鹿者!」

やれやれ、と肩をすくめるのはかの音楽家だ。

貴様こそ作曲の苦労などあるだろうが。

分かってもらえると思ってたのだが。

「あいにく僕は天才でね」

「…貴様に聞いた俺が愚かだった」

「ところでそのポ○モン…絶対にマスターの前で言うなよ」

なぜだ、という意味を込めて奴の顔を見上げる。

全く、どいつもこいつも背丈ばかり高くなりおつて。

その癖詰まっているものはガラクタばかりなのだから勘弁してほしいものだ。

「君知らないの?マスターの端末、非対応機種なんだつて」

「…は!これだから流行に鈍感な奴らは。それでよくF a t e / G O がプレイ「おおーつとメタ発言は禁止だよー」

遮られてしまったので、仕方なく立ち上がる。

まずはプレイヤーに話を聞くことが最優先事項だ。

俺もマスターのレベリングの成果あってついにタブレットを入手した。

強化したのちのアイテムが筆ペンからタブレットに変更というのもおかしな話だが、まあ流行に敏感なこの俺からしたら当然だ。

「おっと。無駄な時間を取られてしまった」

「あら！アンデルセン！」

「……!!」

開けたドアをすぐさま閉めたがもう手遅れだった。

此奴に物理は通用しない。

一体どういう仕組みなのか、いつか暴いてやりたい気もする。

だがそれも、相手が此奴でなかったらの話だ……!

「隠れても無駄よ！今日こそは人魚姫について熱く語るんだから！」

「待て待て！俺は忙しいんだ。あの喜劇作家のところにも言ってる！」

「いやよ！あの人は全然ダメ！」

何がダメなのか、何となく察して口を紡ぐ。

まあ分からんでもない。

何しろ此奴はナーサリー・ライム。

その名のおり、バッドエンド物語そのものなのだから。

「そうね…あなた忙しいって、ネタをお探しかしら？」

「ああ分かっているなら服の裾を離せ。お前に構ってなど」

「お手伝いをするわ！」

何をどう手伝うのか、突っ込んだら負けな気がした。

何と戦っているのかとかそういう突込みはご遠慮願う。

此奴と話すこと自体がもうバトル、いや戦争ものだというところから理解してほしい。

「君が何故そんなに嫌がるのかも不思議なんだけど」

「まだいたのか音楽家！此奴はなあ」

前に此奴が来たばかりのころ、俺も興味があったので話を聞いてやったことがあった。

おいにやけるんじゃない。

決して同情心に絆されたとかではないぞ！

とにかく聞いてやったのが運の尽きだった。

あの日は数時間、いや二桁だったかもしれない。

「此奴の話は永遠に終わる気がしない！今だってそうだろ…!?!」

あの日あれだけ話を聞いてやったのに、まだこの有様だ。しかも話す内容は俺の過去の作品ばかり…。ネタにならないどころじゃない。

あとともう、察してほしい。

「まあ気長にがんばってよ。僕はこれで」

「おい！逃げるのか貴様！」

「アンデルセン！逃がさないわー！」

「ああもう…！」

こうなつたら梃子でも動かぬのは承知している。

無視だ、無視。

今日の目的は人魚姫からネタ探しの手伝いにシフトしているはずだ。

だとしたら黙ってついてくるだけ…だと信じたい。

「おやおやこれは…おもしろ、珍しい組み合わせですね」

「おい、いま馬鹿にしなかつたか？」

「いいえ、滅相もない」

にこやかに笑うその端正な顔すら嘲笑に見えてくるほど、俺はひねくれている。

ああ。自覚はあるさ。

というかこれはあながち間違っていない気もするんだがな。

「同じキャスターとして仲良くしたいと思っていたのですよ」

同じなのはクラスだけで、偉業も業績もすべてあちらのが上。

仲良くできないこともないが、俺なんかに構っているほど暇でもないだろう？

そう告げると、俺はさっさと歩きだした。

「アンデルセン…あなた、友達いないでしょう」

「そういうお前もな」

「失礼ね！私がお茶会に招待すればみんな来てくれるんだから！」

それはエミヤの入れるお茶とお菓子がおいしいから、とは言わないでおこう。

俺も人の子、決して面倒だからとかそういうことではなぞ。

「それにあいつは…やめておけ」

「なあに？」

「…百聞は一見に如かず、という言葉もあるな。自分で確かめろ」  
「けちねー」

思い出したくもない、あのマッドサイエンティストめ！

全く、マスターさえしつかりしていれば…いや、どうにかなることがあるのか？この個性派集団は…。

「ん？そこにいるのは…いい子にしていたか？プレゼントをやりたいたところだが、あいにく手持ちが…」

「いや、結構だ。毎日精が出るな」

「あら、サンタさん！今日もサンタさんなのね！」

此奴は季節感というか常識というかとにかく色々無さすぎる。

王とは勝手な奴ばかりで、特にオルタという存在は度を越している。

幸いこのカルデアにオルタは二人しかいないから助かっているが。とにかく何かの影響なのだろうが、此奴はサンタをやめようとしな  
い。

可哀想など程に。

「ところでサンタ。貴様、俺にもいい子と言ったか？」

「ああ。子どもたちにはいい子にしていたかちゃんと確認しているぞ」

「…一つ忠告しておこう。俺は見た目は確かに子どもだが…中身は子どもではない！」

「落ち着いてアンデルセン。怒る時点で子どもと一緒に」

「怒ったりなどするものか！呆れているのだ。そこらの判断もつかんのか！」

「これはすまなかった…ゆるしてくれ」

何を思ったのかオルタは俺に近づく。

かがみ込んで何をするのかと思いきや、俺の頭に手を置いた。

少々ぎこちないがそれはそれは優しく、まるで子どもをあやすように。

思考の追い付くのが早いか、それを勢いよく振り払った。

「サンタさん、それ、火に油を注いでるわ…」

「油どころか…原油レベルだぞサンタ…」

いや怒ってない。怒ってなどいないが。

「ぶほほ…原油…つ火にガソリン…つ傑作！」

その声に我らは一斉に振り返る。

誰もいないと思っていたのだが、たまたま通りかかった不運な人物がいた。

こともあろうか笑い転げている。

この俺の醜態を見て。

「おい。話がある…行くぞ。…覚悟はできているな？…マスター？」

「ひい！」

「マスター。注意した方がいいぞ。此奴は子どもという怒るようだ」

サンタが余計な口を挟む。

が、今はマスターの躰が先だ。

此奴だけは許さん。許さんぞ。

絶対に。

「こらアンデルセン、大人げないわ！」

「さんざん子ども扱いしておいて今度は大人か…」

随分と都合がいいんだな。

俺はマスターを引きずって歩く。

筋力はなくとも仮にもキャスター。

もがいてようが暴れようが此奴には負けるわけがない。

いや、負けたくはないな。

「待ってえー、ごめんってばあー」

「…なにをしているのです、アンデルセン…とマスター」

「あー助けてメデューサ！」

現れたのは美しき三姉妹の末、メデューサ。

その伝説にも興味はあるが、今はそれどころじゃない。

こつちが先だ！

「マスターの頼みとあらば…さて、アンデルセン」  
ふと嫌な予感がした。

しかし遅かった。

名を呼ばれほとんど反射的にそいつを見た。

一瞬、ほんの一瞬だけ目が合った。

「さて。今のうちにお逃げくださいマスター」

「ありがとおお大好きメデューサ！」

頬にキスしてマスターは走り去る。

俺は何もできずにその場に立ち尽くしていた。

そう、何もできるはずがない。

俺はまんまと魔眼の餌食になっていた。

くそ、なんとという悲劇。許すまじマスター。

「ごめんなさい。かわいいマスターが第二ですので」

その忠誠心は見上げたものだ、が。

時と場合を選んでほしい。

声も出せずに無様な姿をさらしたまま、ピクリとも動けない。

「まあ！これは面白いわ！」

待て！何をするつもりだ！

いつになったらこれは解けるんだ!?

おいメデューサもどこへ行く!?

二人しておいて行くんじゃない…!!

あとには可愛く飾り付けられたアンデルセンの像が残るのみだった。

その後しばらくカルデア内で彼の姿を見た者はいない。

理由は…ご想像にお任せする。



## 慈悲などいらぬ

「なんて言っただけ、あの王様？」

「んーと、あれ、ナントカ王…？」

「本当に王様だった訳じゃないみたいよ」

「…そうなの？」

そんな噂話を聞いた。

名はそこまで有名じゃない。

英霊なんてもんでもなく、反英霊。

「クラスはアヴェンジャー。よろしくなマスター」

「うん！希望通りだよ、よろしくね巖ちゃん！」

「が…がん…!？」

俺は横目でそれを憐れむように見る。

急に変なあだ名を付けるのはマスターの癖だ。

岩ちゃん、真名エドモン・ダンテス。

通称の巖窟王から彼女はそう呼ぶのだろう。

「諦めろ。俺を始め被害者は増えるばかりだ」

「あ！キヤスニキ。巖ちゃんのお世話、しばらくお願いね」

「…な？」

彼は仲間を見付けたかのような目で俺を見る。

おいおい、仮にもアヴェンジャーのあんたがそんなんでいいのか…

？

突っ込みはしないでおくが。

「そうだな、食堂から案内するわ」

「ああ、頼む」

意外と素直な奴だと思った。

我がマスターが連れ歩くには難易度が高すぎる御仁。

手に余るかと思いきや、借りてきた猫のようにおとなしい。

「まあまあ。仲間になるんだから肩の力を抜いてくれや！」

「いや…その、仲間というか」

「なんだい水クセえ」

「おー俺！そいつ新入り？」

「!?」

向こうからやって来たのは槍の俺。

案の定びびってる(?) 巖窟王を見て、イタズラ心が湧き上がる。

目配せすれば、槍の俺もそのようだ。

「おう兄ちゃんよ。あんた強いのか？」

「…俺はアヴェンジャー…復讐に生きる男、目的の為なら手段は選ば  
ん」

「ほーう。それでマスターに売り込みしようってわけか」

「な、そういうことじゃ、」

「いいぜ。俺ら2人で相手してやろうか？まずは分身とか、これくら  
いでどうだ…？」

ジェスチャーで示すのは、取引対価の額。

勿論カルデア内はギャンブル禁止。

ちよつと虐めてやるくらいのもりだった。

しかし。

「なんだい、お金の話かな？」

「げっ…」

厄介な奴が来ちまった。

内心舌打ちをする。

かの有名なダビデ王の名を欲しいままにするれっきとした名君。

しかし実際は…口にするより見てもらった方が早いだろう。

余談だが、マスターはこいつの事を「高田純次」と呼んだことがある。

「いい儲け話、あるよ？そこの新入りくん、着任祝いで負けておこ  
うか」

「はいはい、いい大人がギャンブルなんかするもんじゃないですぜ」

「…」

いつからいたのか、緑のフードを下ろした優男が呆れた声を出  
した。

今日はとことん運が無い。

ダビデに見付かった時点で計画は頓挫したようなものなのだが。

「あんちゃんの方がこういうの得意って顔してんじやねえか」

「まあ得意っすけど。此処ではやりませんよ。ダンテスさんでしたっけ。美味しい飯ありますから食堂行きましよ」

馬鹿は放つといて。

言外にそう聞こえた気がした。

あいつ、覚えてろよ。

年功序列つてやつを叩き込んでやる。

「なんだ、あんたらも来るんすか？」

「エミヤの飯だろ？食うに決まってるんじやん」

「…そつすか。ほらあダンテスさん、何か言いたげつすよさつきから」  
背は高いが俯いて帽子で表情を隠している。

だが先程からキョロキョロとしているのも確か。

「……………ない」

「ん？よく聞こえなかった、」

食堂が近くなりざわつきも大きくなる。

そんな大所帯でがないが、1人1人の存在感がでかい。

「…れは……………ない」

「おや、きたかダンテス殿」

聞いていたとおりエミヤがキッチンに立っていた。

待つてましたとばかりに俺はカウンターにつく。

巖窟王も何かブツブツ言っているが、無理矢理隣に座らせた。

「好きな食材はあるかね？」

「ていうかあんた背え高いよなーどんくらいっすか？」

「巖窟王って詳しくねえんだけど宝具どんなの？」

席につくやいなや、矢継ぎ早に質問が飛ぶ。

あ、待てこれやべえんじやね？

なんか小刻みに震え出したし。

表情見えねえけど、なんかやばい。

この時俺たちはまだ、復讐者の炎を甘く見ていた。

とかナレーションしてる場合じゃねえ！

巖窟王は机に両拳を叩きつけ、叫んだ。

「飯などいらぬ…!!」

そのあまりの迫力に、誰もが静まり返った。

「巖ちやーん！お迎えきたよお」

次に聞こえたのは間拔けなマスターの声。

迷子にならずに来れたかとか、

走ったら転ぶぞとか、

言いたいことはたくさんあるが、そうじゃねえ。

「…世話をかけたな」

…今なんと言った？

世話をかけた…いや、その前。

「お迎え…だと…?」

「サポートでお借りしたの…だけでももうお返ししなきゃね」

「おいマスター」

「行く、巖ちやん！じゃあね！」

止める間もなく、巖窟王はマスターを担いで走り去る。

歓迎してたのは俺らの早とちりだったということか。

いや知らされてない。

待てよ、サーヴァントが来るなんて話も聞いてないぞ。

「よく考えたらあのマスターにはいはい高レアが来るわけ無いんすよ

…!!」

一足早く現状を把握したロビンは呟いた。

あとにはもちろん、残されたサーヴァントたちの怒号が響いてい

た。

「ていうか…反抗期の息子かよ」

先程の巖窟王の一言を思い出して皆が吹き出すのも無理はなかった。

## Fは不幸のF

「頼む…少し、休ませてくれ…」

屈強な体を持つはずのサーヴァントたちがついに膝をつく。

彼らのうちにはすでに倒れた者も幾人かいる始末だ。

端から見れば化け物級の体躯を持つ彼らが、どうしてこうもへばっているのか。

答えは簡単だった。

「みんなもうちよっと頑張つて、おねがい！」

後ろのほうで可愛くおねだりをして見せる橙髪の少女に、皆揃って恨めし顔をする。

こんなことになってしまったのは誰の責任か。

「マスター…。貴様、もう少し幸運を上げたらどうなんだ…！」

そう、我らがマスターは。

とてつもなく運が悪い。

「だーかーらー、ごめんって。そればかりはどうにもならないんだよおお」

他の部分で補おうと努力を惜しまない姿は我らサーヴァントも見ているため、責めることもできない。

皆そうだろう。だからこそせいぜい言いながらここまでついてきたのだ。

だが、それにも限度というものがある。

「これで…何週目…？」

「さあ…二十超えたあたりからもう数えるのをやめたよ」

言うならば我らはハードワーカー。

練度も高いし幸い敵も強くない。

そんな我らがへばっているほど、と言えどもう他に言葉はいらないだろう。

「メンバー、変えませんか？せめて」

「見てよほら、フレンドさんが…」

「うーん。申し訳ないけれど、相性とかあるしー、うちもじり貧だしー…」

うちのマスターは無茶を言うような人間ではない。

小心者だし実力もないし、ちゃんと分をわきまえている。

でもたまに欲に目が眩んでしまうことがある。

今回がそのパターンだ。

「もう無理だー、無理ですー帰りたいー!」

「こら、今回のはいつものただのわがままじゃないんだから、少し我慢しよ」

そう、今回は。

今回はあった方がいいどころか、今の我らにはなくては困るほどの礼装を探しに来ているのだった。

「全く…それでなかったら付き合いきれんぞ」

「マスターは大丈夫か？前線でないとはいえ消耗するだろう」

「ありがとうエミヤ。でも大丈夫、みんな頑張つて!」

マスターの立場ではほとんど何もできないことを彼女は心得ている。

だから無茶は言っても横暴は絶対にしない。

…まあ、これが横暴と言わないのかどうかには触れないでほしいのだが。

「それにしても…落ちない」

「覚悟はしてたけど…さすがにつらくなってきたぞ」

「聞いてない。聞いてないぞマスター。帰ったら…覚えておけよ」

恨むなら気軽にサポートを引き受けてしまった自身を恨んでおけ。

という顔をしていたのでマスターの頭をはたく。

「痛いんだけどアンデルセン…あ。これでいい小説でも書けそうじゃない!?!」

いい加減にしろ。小説舐めんな。

そう表情で訴えてやれば空気を読んだのかどうなのか意味ありげに笑った。

…本当に伝わったのだろうか。

「あきらめる？そんな選択肢、はじめからないよ」

「それどや顔でいうことですか…」

「まだまだ元気なバーサーカーを見習って！暴れたりないって顔してる」

「我々と彼らを一緒にしないで頂きたい…」

全くだ。

理性のタカが外れた怪物と、我らは文化人。

そもそも作りが違う。

「まあでも、前線が彼らだから…まだ助かってます」

「ていうか、この特異点、いつまで開いてるんだっけ…?」

「うん？あと一時間」

皆が戦慄した。

それはつまり、あと一時間は約束されたようなもの。

そして。

それで狩り尽くせなかった時のことを考えるとぞつとした。

「これだけ狩っても礼装の恩恵を受けられないとなると…非生産的だねえ」

「おいふざけるなよマスター」

「ノーノーふざけてるのは私じゃなくてこのシステムでしょう」

確かにマスターにあたるのは間違っているが、そうしたくなる気持ちもとても分かる。

むしろ我慢してるサーヴァントが偉い。偉すぎる。

「そりゃ悪いとは思ってるさ。幸運Fなんだもん」

あまりにも不遇すぎる境遇から付けられたランクは幸運Fという不名誉な物。

本人は「不幸のF！」なんて叫びまわってあまり気にしていないよう（に見える）だ。

少しは気にしてくれ。

本人曰く、気持ちでどうにかなるものじゃないらしい。

それについては心当たりがあるのであまり突っ込まないが。

「僕たちみたいな比較的幸運高いのがいてもこれですから…」

このパーティーには騎士王アルトリアや英雄王の子ども時代など幸運値の高い奴らも交じってはいる。

だがあまり効果を発揮しない。

それは今までのクエストでも実証済みである。

「なあマスター…こういうのもなんだが…、あきらめも肝心だぞ」

「そうだな。引き際というのものもある」

どうにもならない理不尽は何度も経験してきたマスターだ。

運がないせいであらゆるところで被虐体質を発揮してくる。

このマスターに限って、何も起こらない平穩は存在しない。

それを打開する力も持っていない。

「…私があきらめ悪いって知ってるくせに」

それは知っている。

往生際が悪い、と言った方が正しいかもしれん。

そして、頭も弱い。割と本気で。

「完璧なマスターじゃなくて悪かったわね」

おまけに少し、いやかなりひねくれものだ。

可愛くおねだりすればある程度大丈夫だと思っっているあたりが特に。

「たとい何も得なくても、あきらめるのは嫌なのー！負けた気がするのー！」

「…誰と戦っているかは知らんが、お前が勝てる相手などそうそういないだろ…」

「ひどい!!」

彼女の場合二通りだ。

本当に中途半端が嫌できつちりやり切りたいと思っているか。

あるいは、〃ほとんど見えてこない希望にまだ期待している〃かだ。

「物欲だけは一人前だな」

「だって…この前だって拾えたんだもん！」

前回はまた同じような目にあって、終了三時間前で何とか拾うことが出来たのだ。



そうして甘い蜜をすった彼女は性懲りもなく二度目三度目を夢見る。

「悪いとは言っていない。こればかりは確立の問題だからな」  
それについていく我らもどうかしているのだ。

最初から諦めているくせに、惰性でマスターについて行くことはない。

皆希望を持っているからついていくのだ。

「金色の箱あるよー」

「!?」

その声に一齐に振り返る。

ようやくここで終われるかもしれない。

誰もがそう安堵した直後だった。

「これは…」

「……」

「ああ。うん…知ってた」

「マスター……!」

もう怒ってもいいだろうか。

中から出てきたのは金色のモニュメントだった。

「みんなああああもう一回おねがあああいい!」

怒鳴ろうとした声をかき消すように、彼女の悲痛な叫びが響き渡った